

7月7日、大川小見学後、女川脱原発講演会に参加



7月7日（日）きらきら発電は震災遺構大川小見学と女川脱原発集会への参加を兼ねたバスツアーを企画。泉病院・長町病院の元職員やあいコープ組合員ら24名が参加しました。

最初に大川小学校跡地を訪ね、遺族の語り部佐藤敏郎さん(次女を失う、本人は元中学校教師)のお話を聞きました。「訓練が本番という真剣な気持ちがないと意味がない。自然災害は止められないが、人災は防げる。大川小は人災だ」と大きな瞳で訴えました。

元看護師さんたちはみな「本当、訓練が本番という言葉が心にズシロときた」と感想を述べておられました。また佐藤さんの最後の説明「この悲劇から、未来を拓(ひら)くことが私たちに課せられている」との言葉も心に残りました。「最初は行くことに躊躇していたが、見学出来てよかったと思う」と多くの方々が口にしました。

女川駅で昼食を食べたあと、脱原発女川現地集会に参加。青木美希さんの取材映像を駆使した記念講演を聞きました。青木さんの映像の最後に「エネルギーオフグリッドをめざす広幡家」の写真が登場。びっくりさせられました。

集会には550人が参加し、終了後、350人が女川に残り町内をパレードしました。女川町内の反核パレードは30年ぶりとか。すばらしい企画となりました。

帰りのバスで、「東北電力から電気を買うのをやめたい」と、パルシステム電気購入の希望者が現れました。「同窓会みたいで楽しかったからまた一緒に旅行したい」との声もあがりました。



あいコープ組合員の佐藤育子さんより「水戸部先生に安定ヨウ素剤普及に協力していただき、今も継続しています。感謝・感謝です。」との言葉もいただきました。

水力発電 楽しく学ぶ

大崎の保育園が学習会

水力発電について子どもたちに楽しく学んでもらおうと、再生可能エネルギーの普及に取り組み県内4団体でつくる「みやぎ地域・市民電力連絡会」は6月29日、大崎市の古川くりの木保育園で環境学習会を開いた。

園児や保護者ら約40人前に、連絡会のメンバーが水力発電の仕組みや歴史を説明。園庭に自転車の車輪で作った水車を設置し、水道水で回した。クマの人形が動き出したり、扇風機が回ったりする様子に子どもたちは大はしゃぎ。井口瑞月ちゃん(5)は「太陽で電気が作れるのは知ってたけど、水でクマが動いて面白い」と笑顔で話した。



水車で動き出したクマの人形に興味津々の園児ら

秀利理事長は「楽しみながら再生エネに興味を持ってもらえたら」と話した。学習会は昨年に続いて2回目。回園は2022年、連絡会などの協力で屋上自家消費向けの太陽光パネル7・8誌分を設置し、年間使用する電力の10・6%を賄っている。

きらきら発電・市民共同発電所 ニュース
2024年8月118号
〒981-3215 仙台市泉区
北中山3丁目17-12
070(2010)3777
HP kirakirahatuden.com/
hirohata3888@outlook.jp

東北各地の先進的取り組みに学ぶ (1)

もう一つ大事なことは、先進地に学ぶこと。法人結成の2015年からコロナパンデミック発生の前年2019年まで、東北の先進地を学ぶ「自然エネルギー見学旅行会」を企画しました。私たち自身が太陽光発電に取り組んでいたため、他分野の自然エネルギーを学ぶことに力を入れました。



地熱発電

(上写真=2015年土湯温泉見学)

2015年の第1回旅行会で、福島県土湯温泉の「元気アップつちゆ」の地熱発電(バイナリー発電)と小水力発電を見学しました。地熱発電は普通1千度を超える蒸気を利用した発電ですが、ここでは温泉用に掘削した60度程度のお湯の熱をノルマンペタンに転化し、低温の気体で発電する方式を採用。440kw/h、ドイツ製。この方式だと温泉を新しく掘削する必要がないことがメリット。しかも温泉組合の組合長が地域おこしのために発案した発電所です。2019年再訪すると手長エビ養殖をしていました。エビは地元の温泉旅館に提供し大好評だとか。青森の温泉地から学んだ方法で、地域おこしが進んでいる姿を見ることができました。

最近の情報で、仙台市の馬淵工業所が国産バイナリー発電機を開発中とか。有機ランキンサイクル発電システムで、2025年販売予定。この装置は温泉水だけでなく、バイオマス有機発酵熱も利用できるとのこと。

2017年岩手旅行では、1966年10月日本で最初に作られた松川地熱発電所を見学。1993年6月に22,000kWから23,500kWに出力変更しています。ここは規模も大きく、かつ使った温泉を松川温泉に引いて温泉街をつくりだしていました。地熱発電は自民党の原発優先政策の中で開発が禁止され(国立公園では許可しない)ていましたが、民主党が2010年法律を変え23年ぶりに地熱発電建設が再開されました。再開のトップ秋田湯沢の山葵沢発電が2019年5月運転開始され、泉病院友の会環境委員会で見学してきました。46199kwの発電容量。東北では安比高原・小安峡・湯沢木地山・松尾・岩木山・磐梯の6か所で今開発工事が進められています。

小水力発電

2015年「元気アップつちゆ」で小水力発電(140KW)を見学しましたが、2019年には長井おひさま発電の野川小水力発電を見学。ここは農業用水路を利用した典型的な里山発電所(15KW)。農業用水利用の小水力発電所は、2018年一関市萩野発電所(土地改良区、13・5kw)の見学(ドイツ製のらせん水車)、2020年仙台市朴沢小水力発電(仙台市経済局農林土木課7kw・写真下)を見学。限界集落対応の国の補助金を活用した地域おこしとして建設されています。

私たちが注目するのは「既に敷設されている上水道管を利用した小水力発電」。2019年8月、きらきら会員で産電工業社長の高橋氏を招き、2019年3月に白石市福岡弥次郎地区の公益水道管に建設した小水力発電(8・6KW)を報告してもらいました。白石市にはこのほかに、仙南・仙塩広域水道管を利用した白石発電所(95KW・白川津田地区)があります。



仙台市内にも上水道管利用の小水力発電所が2か所あり、2023年12月1日仙台市水道局上追沢発電所(199KW)を見学。川崎釜房ダムから流れ落ちる落差を利用した発電所で、東芝が運営していました。ほかに茂庭浄水場施設にも小水力発電所があります。このような上水道管利用の発電はごみ対策が不要で、かつ敷設されている管を利用するので、必要経費が抑えられるメリットが多く、かつどんな場所にも建設可能な発電所です。自治体が音頭を取って、小水力発電所建設をおおいに進めるべきです。

なお上水道管だけでなく、農業用水の地下パイプラインを利用した小水力発電も存在します。秋田県美郷町の「仙平美郷本堂地区小水力発電所」で、土地改良区の運営となっています。(続く)